

7 てんかん症例におけるDiazepam 負荷 SPECT.
吉澤 卓, 松村 明, 山田雄三, 榎本貴夫, 能勢忠男 (筑波大脳外), 佐藤始広, 武田 徹, 板井悠二 (筑波大放)

てんかんの焦点を確認し得た6症例で行われたDiazepam 負荷(2mg, i.v.)前後のTc-99m ECD 負荷 SPECTの所見をこれとその拮抗薬負荷による functional MRIならびに脳波所見とを比較した。low grade astrocytomaなど器質的な疾患に伴うてんかんではその病巣に一致したf_MRI所見が得られたが、SPECTの所見はこの領域を被い、かつ脳波所見の異常域の方向にCBFの抑制を示した。器質的な局在性病変が認められなかった症例でも開頭後の脳波所見に一致した異常波の中心を表示し、さらに頭皮誘導の脳波所見に合った位置でのCBFの抑制も認めた。切除が不十分であった側頭葉てんかん症例では断端部に大きな変化を残したが、成功した症例では術後の変化が小さくなっていた。以上、この方法は焦点を非侵襲的に示唆できたと考える。

8 脳血管障害におけるL-DOPSの効果
— ^{123}I -IMP SPECT定量測定による検討

小山真道、畑澤 順、下瀬川恵久、小川敏英、角 弘論、犬上 篤、奥寺利男 (秋田脳研放)、西野克寛 (公立角館病院脳外)

抗パーキンソン病薬L-DOPS (droxydopa)を慢性期脳血管障害患者18例 (脳梗塞9例、脳内出血9例; 男性15例、女性3例; 50~72歳、平均61歳) に経口投与し、投与の前後の血流の変化を評価した。脳血流測定は、 ^{123}I -IMP ARG法にて行った。L-DOPS 200~300mg 投与開始後2~12週のSPECTでは、18例中、12例で脳血流の増加がみられた。健側および患側大脳半球での増加量はそれぞれ平均 $5.0 \pm 4.1\text{ml}/100\text{ml}/\text{min}$, $4.7 \pm 4.1\text{ml}/100\text{ml}/\text{min}$ 、増加率はそれぞれ平均 $16.3 \pm 6.6\%$, $14.6 \pm 5.2\%$ であった。健側、患側間には増加量、増加率ともに有意差はみられなかった。

9 アニラセタムによる脳血流量改善効果についての検討

東京医大 老年科¹⁾, 立川綜合病院²⁾

小川公啓^{1) 2)}, 勝沼英宇²⁾, 浅野哲一^{1) 2)},
櫻井博文^{1) 2)}, 参木保至^{1) 2)}, 石田 均²⁾,
山本 功²⁾, 高崎 優¹⁾

アニラセタムによる脳血流量の変化を ^{123}I -IMP SPECT ARG法を用いて検討した。対象は脳梗塞患者7例、アルツハイマー型老年痴呆患者2例、脳動脈硬化症患者3例、計12例で平均年齢75.6歳。全例にアニラセタム600mg/day 投与し、投与前及び投与3カ月以降に脳血流量を定量し比較検討した。脳血流量はアニラセタム投与3カ月以降で増加傾向を認め、脳梗塞患者では特に健側での血流増加が目立った、意欲の亢進など精神症候も改善傾向を認め、脳代謝亢進に伴う細胞エネルギー賦活により血流増加が得られたものと考えられた。